



TITLE:

文化的認識と歴史的認識(二・完)

AUTHOR(S):

恒藤, 恭

---

CITATION:

恒藤, 恭. 文化的認識と歴史的認識(二・完). 經濟論叢 1923, 17(2): 203-225

ISSUE DATE:

1923-08-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128057>

RIGHT:

# 京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第七十卷 第二號

大正二十二年八月一日發行

## 論叢

武士成立の經濟的要素……………文學博士 三浦 周行  
綜合奢侈稅の批評……………法學博士 神戸 正雄  
獨立海運業者の排他的手段……………法學士 小島昌太郎  
文化的認識と歷史的認識……………法學士 恒 藤 恭

## 時論

地租委讓と收入の缺陷……………法學博士 小川 郷太郎  
農村問題と其對策……………法學博士 河田 嗣 郎

## 說苑

壹岐國に於ける地割制度……………農學士 奥 田 彥  
歷史派經濟學發達の徑路……………法學士 山口 正太郎

## 雜錄

氏族制度雜考……………法學士 本庄榮治郎  
報酬遞減法則の適用範圍……………法學士 山口 正太郎  
照應計算の一方方法……………經濟學士 蜷川 虎三

# 文化的認識と歴史的認識 (二・完)

恒 藤 恭

目次——一學問價值に關する批判主義の見地 二文化的認識の二方向 三個性の原理に關するリツカートの思想 四主觀的評價作用に基く個體の定立(以上前號所載) 五理論的價值關係方法の目標たる價值について 六普遍化的文化的認識 七個性化的文化的認識としての歴史的認識 八價値の個性と實在の個性 九價値の世界と文化の世界(以上本號所載)

## 五

リツカートは、理論的價值關係方法を以て、科學的、歴史的認識の本質たるものと視、それをして實際的評價作用に對立せしめてゐるが、彼の見解に従へば、理論的價值關係方法は、二つの點において、實際的評價作用と相違するのである。第一に、前者は後者の如く價値その者を問題とするものではなく、價値との關係において實在なるものを問題とするものである。次に、後者によつて定立される價値は、主觀的妥當性を有するにすぎないに反して、前者が顧慮する所の價値は、客觀的妥當性を有するものであらねばならぬ。

私は斯うした見解にその儘承認し得ない者であり、理論的價值關係方法が、價値の評定を目的とせず、實在の認識を目的とするものであることは、勿論之を認めるけれど、理論的價值關係方

法において、實在が關係せしめられるべき價值は——この方法の本質から見て——必ずしも客觀的價值たることを要せず、主觀的價值たることを妨げないと思惟するのである。この後の可能性が利用される場合、すなはち實在が、主觀的、個人的價值に關係せしめられつゝ、認識される場合には、その價值に對して評價主體たる地位に立つ所の特定の個人を中心として、その價值に關係ある内容、對象又は事實の群れと、然らざる内容、對象又は事實の群れとの區別が、認識されるわけである。この場合において、關係の目標たる價值は、主觀的、個人的妥當性を有するにすぎないけれど、それに關係せしめて實在を認識する方法の成果は、客觀的、普遍的妥當性を有し得るものと言はざるを得ない。

前に擧げた例を利用するならば——或る人が、年來使ひ慣れた一個の硯、亡友の形見たる一冊の書物、居宅の庭前に立つ一本の樹木に對して、個性的意義をみとめるのは、これらの物に附着せる個性的價值内容を評價する彼自身の意識に基くのであり、従つて彼がこれらの物の個性的意義を主張する判斷は、それ自身には、彼みづからに對してしか妥當しないことは、明かである。併しながら、この場合にわれわれが、問題たる硯、書物又は樹木を理論的考察の對象とし、それらの物がかの個人にとりて有つ所の主觀的、個人的價值に關係せしめて、それらの物の實在的個性を認識することは、可能であると言はねばならぬ。斯かる態度をとる時、われわれがその物に

ついで構成する思想内容は、毫も價值的要素を含むことなく、實在的要素のみによつて充されるであらう。そして、多様な直觀的内容の中から採擇される成分は、目標として定立された價值に關係ある成分に限定されるであらう。例へば、かの個人の亡友の遺品たる書物について言ふならば、その表紙の一隅の手擦れとか、各頁に見られる朱色のアンダーラインとか、往々にして走り書された評言とか、多少の意匠を加へた *ex libris* とか云つたやうなものは、其際われわれが、その書物の個性的意義を規定するに當つて、まさしく採擇すべき内容たるであらう。問題たる硯なり、書物なり、樹木なりが、かやうな仕方で、その個性的方面から認識された場合には、斯かる認識の成果は、決してかの個人の主觀的評價作用の所産と、その意義において同一視されるべき筈のものではなく、言ひ換へると、客觀的、普遍的妥當性を有し得るものと、言はねばならぬ。かやうに、理論的價值關係方法において、關係の目標たる價值が、假令主觀的、個人的妥當性を有するにすぎないものであるとしても、その認識成果は、客觀的、普遍的妥當性を有し得るのであるが、この種の理論的價值關係方法によつて規定される對象の個性的意義は、本來その對象の有する主觀的價值の其れによつて制約されるものたる以上、該價值の評價主體たる個人の立場又は何等かの意味において彼に類縁せる者の立場においてのみ、興味有りとされるものたることは、論を俟たない。換言すれば、この場合の判斷は、客觀的妥當性を有するとは言ふものゝ、そ

れば、問題たる對象の個性を、特定の個人的主觀との關係において主張するといふ條件の下にのみ、客觀的に妥當するに止まり、若しも斯かる條件が撤去されるならば、その客觀的妥當性も亦失はれざるを得ないのである。

理論的價值關係方法によつて把握される對象の個性的意義が、無條件に——すなはち主觀一般に對して成立するものたるためには、對象の關係せしめられる價值その者が、十分なる意味における普遍妥當性を有するのでなければならぬ。けれども、リツカートは、科學的、歴史的認識の價值關係方法において標準とされるべき價值について、斯かる嚴密なる意義における普遍妥當性を要求してはゐない。すなはち彼は曰く、『歴史的認識をして科學的意義を具有するに至らしめるために要求される所の、價值の普遍性は、歴史的にあたへられた一定の社會もしくは團體において、一般的に承認せられるといふ意味においての普遍性たるを以て、足れりとするのである。この謂はゆる文化價值の普遍性こそは、歴史的觀念構成の客觀性の根柢を成すものである。哲學的なる觀點からすれば、斯かる歴史的客觀性の概念にも、なほ問題が含まれてゐるのであるけれど、歴史家の立場においては、歴史の經驗的客觀性のみが、問題とされるのであり、或る財が文化社會の裡にあつて、普遍的に評價されてゐるといふ事實が、歴史家にとりては、重大なる意味を有するのである』<sup>1)</sup>。

1) cf. Rickert, Die Grenzen, S. 245-247 250ff.; Kulturwissenschaft u. Naturwissenschaft, 2. A. 1910, S. 98-100; Geschichtsphilosophie (Philosophie im Beginn des 20. J. h.) S. 85 ff.

理論的價值關係方法において、對象の關係せしめられる價值が、十分なる意味において普遍妥當性を有するものたる場合には、該方法によつて把握される對象の個性も、亦、十分なる意味において普遍妥當の意義を有すべきわけであるけれど、さうでない限り、理論的價值關係方法による對象の個性の認識が、一般に經驗的客觀的妥當性以上に出で得ることの保證は、當然にはあたへられない筈である。かくは言ふものゝ、理論的價值關係方法の目標とされる價值が、假令經驗的にもせよ、普遍的に妥當する性質を有する以上は、それに關係せしめられることにより認識される實在的對象の個性は、原理的に特定の個人的主觀にとりてのみ興味ありとされる底のものではなく、數多の個人的主觀にとりて興味ありとされるものたるべく、恐らくは個人的主觀一般にとりて興味ありとされるものたる場合も存するであらう。そして問題たる價值が、リツカートのいはゆる文化價值であるやうな場合には、それに關係せしめられて認識される實在的對象の個性の意義は、比較的に大なる普遍妥當性を具有し得るものと、言ひえられるわけである。

かくて理論的價值關係方法は、主觀的妥當性を有するにすぎない所の價值を目標としても行ひえられるものではあるけれど、その成果が科學的意義を有し得るためには、客觀的妥當性を有する所の價值を目標をすることを要するのである。

## 六

理論的價值關係方法において、對象の關係せしめられる價值が、假令經驗的意義においてもせよ、普遍妥當的たるのでなければ、科學的、歴史的認識は、成立し得ないとして、對象を普遍妥當的價值に關係せしめて考察するといふことが、如何にして對象の個性を規定する所以となるであらうか？ 對象をして普遍妥當的價值に關係せしめて考察するときは、一定の範圍内における對象の中につき、その價值に關係ある對象が、それに關係のない對象から區別され能ふことは、明白であるし、或は又、直觀的内容の多樣の中から、普遍妥當的價值に關係せしめられた内容を擇出して、ある對象の構成に役立てる場合には、その價值に關係のない内容が、該對象の構成に役立ち得ないものとして斥出されることも明白である。けれども、唯それだけであつては、問題たる價值に關係ありとされる對象が、歴史的個體として認識されるものではなく、問題たる價值に關係ありとされる内容が、歴史的個體の本質的成分として認識されるものでないことも亦、明白である。言ひ換へると、或る對象又は或は内容が、一定の普遍妥當的價值に關係せしめられるといふことは、この方向における認識の過程において、單に一步を進めるといふだけであつて、それから先き、普遍化的概念構成方法の途をとるか又は個性的概念構成方法の途をとるかは、この階段その者にあつては、未だ決定されて居ない問題であり、従つていづれの途に向ふことも、等しく可能たるべき等である。私は、一般に茲に規定したやうな方向をとる認識方法を――



すなはち一般に普遍妥當の價值に關係せしめて實在を考察する認識方法を、文化的認識方法と呼ぶと思ふ。しからは、文化的認識方法は、普遍化的及び個性化的認識方法と、如何なる仕方で結合するのであらうか？殊に、それは、如何なる機因に基いて、個性化的認識方法と結合し、以て歴史的認識方法を成り立たしめるのであらうか？——實在的對象が價值普遍性又は普遍的價值に關係せしめられて考察される場合には、普遍化的文化的認識が行はれるし、實在的對象が價值個性又は個性の價值に關係せしめられて考察される場合には、個性化的文化的認識が行はれると、私は思惟するのである。

實踐的活動の主體としての個人の評價作用に基いて成立する所の個體が、恰もそれが或る個人にとりて有する個性の價值内容のために、その個人の實踐的生活の立場から觀て、絶儔的、不可分的なる個體として妥當するといふことは、前節に述べた所である。すなはちその个性的内容において定立された主觀的價值に、理論的に關係せしめられることにより、一定範圍内の物象又は事象は、理論的意義における個性において認識されるのである。重ねて前の例を用ひるならば、久しく使ひ慣らした硯に向つて或る人の認める主觀的價值と關係せしめられるとき、彼が嘗つてその硯を手に入れた某年の某日、彼がその硯を購求した一文房具商、その硯の質、形、色、彼によつて磨りへらされた硯の丘の凹み、年來その硯を容れ來つた硯箱、その中に硯と同居せる筆架

水入れ、彼がその硯によつて辨する日常の用途、彼が墨を磨る場合の手癖といったやうな、種々なる物象又は事象は、個性的なる意義を有するものとして、認識され、規定され、相合してその硯を中心とせる個性化的價值關係の知識の内容を形成するものである。かやうにして定立された個々の物象又は事象の個性的意義が、かの特定の個人にとつてのみ妥當するといふ點は、姑く之を措いて——この場合に、理論的價值關係方法によつて、個性的對象が個性的對象として定立されるのは、その關係せしめられる價值の個性に基くものたる點を、特記しなければならぬ。而して或る對象の具有する直觀的個性的内容を地盤として、その對象が特定の個人にとつて有する所の個性的價值は、成立するのであるが、論理的見地から觀れば、或る對象が特定の個人にとつて有する所の個性的價值に關係せしめられることにより、その對象の具有する直觀的個性的内容の中から、一定の内容が抽出され、その對象の實在的個性的意義を構成する要素として採用されるのである。

これと平行した論理的關係が、科學的、歴史的考察方法の場合についても、觀取しえられると思ふ。この場合に、對象の關係せしめられる價值が、主觀的個人的意義を有するにすぎないものではなく、文化社會もしくは文化團體に對して一般的に妥當するといふ、客觀的、普遍的意義を有するものであることは、右に指摘した平行的關係の存立を阻礙するものではない。

價值關係的考察方法において、その出發點たるべき所の、直觀的にあたへられた素材の無限に多様な個性的内容が、普遍妥當的價值に關係せしめられるときに、多くの對象に共通なる普遍性の方面が注目され、指定されるといふことは、論理的に十分可能であると、言はざるを得ない。この場合には、對象が一定の普遍妥當的價值類型に<sup>1)</sup>一般的に關係せしめられることによつて、認識の目的は達せられるのであつて、該價值の個性的内容は、全く顧慮されることを要せぬ。例へば、一般法學の立場において、人間の一定の動作の連續が、意思表示もしくは法律行為として認識される場合、又は純理經濟學の立場において、一定の物質的對象が、貨幣もしくは生産原料として認識される場合に、それらの心理的又は物理的對象が關係せしめられるのは、法律的價值類型又は經濟的價值類型であると、私は考へるのである。

實在的對象が價值に關係せしめられつゝ考察されるといふのは、實在的對象が顯在價值又は顯在反價值の存立の支盤として考察されることに他ならぬ。顯在價值又は顯在反價值は、經驗的實在の構成要素の一定の配列と結合することによつてのみ、その存立を保持し能ふものであり、斯かる關聯において、經驗的實在の諸對象が提示する所の複雑なる様相の把握こそは、文化的認識の任務とする所である。——直觀にあたへられた無限に多様な内容を、實在の範疇を通して、實在の世界にまで組成する立場において、自然的認識は、斯かる世界の構成分子として各個の對

- 1) 價值類型の概念については本論叢前卷第六號、拙稿『價值の類型と個性』十四節參照
- 2) 顯在價值の概念については前掲拙稿十二節參照

象が有する性狀を考察し、それらの對象に普遍的なる性狀にしたがつて、一切の對象を規定しやうとするのである。普遍化的文化的認識は、對象の普遍性に着眼すると云つても、その意味は、自然的認識が對象の普遍性に着眼するのとは趣を異にして、對象が價值との關係においてあらはす所の普遍性に着眼するものと言はねばならぬ。素より或る對象が價值との關係において示す普遍性は、それが自然的認識にとりて有する所の普遍性によりて事實的に制約されるであらうけれど、その故を以て、これらの二様の普遍性の認識は、同一の論理的意義を有するものと云ふことは能きない。價值關係の見地における諸對象の間の普遍的關係は、非價值關係の見地における諸對象のそれとは異なる内容を有し得るものであり、従つて前後において、對象の普遍性の論理的意義は、同一たりえないのである。

顯在價值はさまざまの種別相を提示するものであり、顯在價值の種別の異なるに従つて、それが經驗的實在の支盤と結合する様相も異なると同時に、同一種別の顯在價值の類型については、それによつて包攝される一切の個別的普遍的價值が經驗的實在の支盤と結合する仕方は、同一の普遍的形態をあらはすのである。他の表白方法を使用するならば、經驗的實在が、同一種別の普遍的價值と、同一の普遍的形態において結合せるものと認識される限りにおいて、この方向における文化的認識は成立し能ふのである。勿論この場合において、認識の目的とする所は、實在的

概念の構成に存するのであるから、價値の把握その者は問題ではなく、單に實在的支盤が價値と交渉し連關する様相が考慮されるのであるが、その際、價値と經驗的實在とが關係し合ふ様相の個性的方面は興味範圍の外に置かれ、その普遍的方面のみが注目されるのである。例へば、宗教學の學者が神に對する犧牲の様式を考察する場合、一般私法學の學者が所有權の制度を考察する場合、純理經濟學の學者が市場における競争價格の決定の過程を考察する場合、政治學者が國家の發生の態様を考察する場合等において、これらの考察對象は、宗教的、法律的、經濟的、政治的等の各價値類型に關係せしめられつゝ、これらの價値類型が經驗的實在と交渉し聯結する普遍的様相の發現として認識されるのである。これらの場合において、各個の方向における文化的認識が、いかなる程度において、對象の普遍性の把握に成功し能ふかといふことは、一般的には豫測し得られぬ事柄であり、更に其れの成果が法則たる意義を有し能ふか否かといふことは、一般に法則の概念を如何様に規定すべきであるかといふ問題と關聯して、それ自身詳細に考察されることを要する問題であるが、右に例示した場合を通じて、認識の目指す所が、對象の普遍性に存する事は、明白であるし、且つ從來事實上、其企圖は或る程度において成就されて居ると言ひ得ると思ふ。

## 七

個性化的文化的認識、すなはち歴史的認識にあつては、問題は一樣でない。價值に關係せしめられつゝ考察される對象その者は、本來直觀的個性的性的内容を具有するものであるが、その中から一定の内容が抽出されて、歴史的個體の構成要素として役立てられることが、可能なるためには、それ自身個性的なる内容が、單に價值に關係せしめられるといふだけであつては、不十分である。言ひ換へると、一定範圍内の對象の中から、價值に關係ある對象のみがゑらび別たれ、更にそれらの對象の其れ自身個性的なる内容につき、價值に關係ある部分がゑらび別たれたとしても、それだけでは、歴史的個體と呼びえられる所のものとは成立しない。何となれば、或る對象の具有する内容の中で一定の價值に關係のある部分を把握し得たところで、その對象が、一定の價值との關係において、他の一切の對象から區別される個性的意義が、闡明された事とはならぬからである。すなはち此場合に、問題たる對象の原本的なる個性よりも一層高級なる個性が認識され得るためには、特殊の考察の興味が加はらなければならぬ。この特殊の考察の興味は、前に吟味した主觀的價值關係方法の場合におけると同様に、對象の關係せしめられる價值の個性的内容の顧慮から生まれると思ふ。

價值の個性的内容の顧慮は、歴史的認識の客觀性を毀損するものではないかといふ疑惑が生じるかも知れないけれど、事實はさうでない。一般に價值關係方法においては、對象が單に理論

的に價值に關係せしめられるにすぎないといふ意味の中には、『對象の關係せしめられる價值その者に關して、歴史家はみづから評價主體として、一定の價值内容を、或は正の方向において、或は負の方向において、評定するものではなく、文化社會もしくは文化團體において、一定の價值内容が承認されてゐるといふ事實を認識し、斯く認識された價值に、對象を關係せしめるのである』といふことの主張が、包含されてゐるのである。價值の個性的内容の顧慮は、歴史家みづからが、特定の個性的内容を、帶價値的もしくは帶反價値的として定立することを意味するものではなく、價値が、その特定の個性的内容において、文化社會もしくは文化團體において承認されてゐる事實を、客觀的に認識し、斯かる認識の結果を、經驗的實在の考察に資することを意味するものに他ならぬ。かく認識されたものとしての個性的價値に關係せしめられて、實在的對象が考察される場合には、その價値が經驗的實在を支盤として實現され、保存され、破壊され、又は滅失される様相の普遍的方面は、興味の範圍外に逸するのであつて、恰もその價値が、その個性的なる内容において、經驗的實在の支盤と聯結し交渉する所の、全然特有な様相を、認識すること——換言すれば、實在的對象が、個性價値と聯結し交渉する關係において、他の一切の實在的對象においては觀取され得ないやうな、個性的形態、個性的色彩を提示する方面を、認識することが、主眼とされるのである。その結果『一定の個性的價値の關係において、正にその價

値の個性の存在に對し、積極的に又は消極的に寄與することにより、或る對象が獨自の意義を有する所以のものを『形成する所の内容が、該對象の具有する、それ自身個性的なる内容の中から抽出され、それに因つて、該對象の實在的個性は規定されるのである。この點について、事實的考察の見地からすれば、個性的價值は、個性的實在の支盤によつて、その存立を可能とされるのであるけれど、論理的考察の見地からすれば、個性的實在の成立が、個性的價值との關係によつて初めて可能とされるものと、言ふべきであると、思ふのである。

## 八

或る對象が、例へば形而上學的に構想された原子の如くに、一個の全然單純なる分子から構成されてゐるといふのであつては、個性の成り立つ餘地はなく、個性を有する對象は、必ずや數多の分子の合成する所でなければならぬ。但し或る對象が數多の分子を含有するのであつても、それらの分子が、單に機械的な原理によつて結合し、以て其對象を構成して居ると云ふのであるならば、その對象の個性は確立してゐると言ふことを得ない。何故といふに、その對象を任意の仕方で分割した場合に、それによつて生じる數個の對象は、相互に全然同一なる構造を有するのであつて、分割を受けた對象が、分割によつて生じた對象から區別される所以のものは、前者の具有する一定の構造に依存しないからである。或る器にたゞへられた水の一定分量又は一塊の石



炭などは、如何様に分割されても、自然科學的に考へられた構造において全然同一の性状を有する個體が、新しく成立するのであらう。しかるに目的々原理によつて構成されてゐる對象の場合においては、或る個體を任意に分割することにより、それと全然構造を同一にする新たな個體を生ぜしめることは、不可能である。たとへば一つの艸花、又は一匹の昆虫は、その不可分割性によつて個體としての自己の存立を主張するものであり、分割によつて、自己と同一の構造を有する個體を成立せしめるものではない。文化的意義における個體は、生物などの場合とひとしく、不可分割性によつて自同性を保持するものであるが、その不可分割性の基礎は、個體の實在的構造その者の裡に内在するのではなくて、何等かの普遍妥當の價值との關係において與へられるのである。そして斯る價值との連結が、個體の不可分割性を新しき意味において成り立たしめると同時に、その絶儔性を新しき意味において成り立たしめることによつて、文化的個體は進んで歴史的個體たるに至るのである。實在的對象が價值類型に關係せしめられるときは、直觀又は自然的認識の場合におけるとは異なる所の、新しき意味における不可分割性は成り立つであらうけれど、かくして認識される文化的個體は、その直觀的個性的内容によつてそれ／＼絶儔的たるに止まり、それ以上の絶儔性において定立されてゐるわけではない。其れが、價值關係の見地における絶儔性を獲得するためには、その關係せしめられる價值が、個性的價值でなければならぬ。

惟ふに或る對象の不可分割性は、その對象其者に即して思惟しえられるけれど、その絶儔性は他の對象との比較によつてのみ思惟し得られるのである。しかも絶儔性は單なる別異性と其軌を一にするものではない。或る普遍的なるものゝ單なる見本としての甲乙丙などの諸對象が、相互に別異なる個體たることは、明かであるけれど、斯かる關係においては、甲乙丙等の各者をして絶儔的たらしめるべき基礎は、毫もあたへられない。今甲乙丙等が、『特定の類型的價值に關係せしめられた實在的對象の普遍的概念』によつて包攝される個體的對象であるとすれば、その各者は文化的個體としては、全然相等しき性狀において認識されて居るのであり、各者の具有する直觀的内容の個性を措いて、他に各者をして他者から區別されしめる所の絶儔性は、觀取されるべくもないのである。前述の如く、私の考へる所では、この絶儔性は、實在的對象の個性的價值に對する關聯によつてあたへられるのである。

或る對象が、他の諸對象と相率ゐて、一個の連續的系列の中に立ち入り、その中にあつて——何等かその對象に關して特有なる理由により——他の如何なる對象を以てしても置き換へ得られないやうな獨自の地位を占有する場合において初めて、その對象は十分なる意味における絶儔性を取得するのである。そして、一系列の裡にある諸對象が、悉くさうした獨自の地位を保有する場合には、それらの對象によつて構成される系列は、それ自ら全然個性的なる統一的全體を

提示しつゝ、更により包括的な系列に参加せむとするであらう。文化的對象が、斯くの如く全體が部分の個性を制約すると同時に、部分が全體の個性を制約するやうな系列を形成するものとして、認識されることは、かやうな全系列を構成する一切の對象が、何等かの普遍妥當的個性的價值に關係せしめられ——該價值の個性的内容の運命に交渉する方面からして、その個性を把握されることを意味するものと言はねばならぬ。

相互に異なる性狀を有する若干の對象が、一定の價值類型に關係せしめられる場合には、それらの對象の各個に特有なる性狀は問題とされず、價值との關係において普遍的なる性狀のみが考慮されるのであるから、それ等の對象によつて合成される體系において、各個の對象がそれぞれ獨自の地位を占有するとは、考へ得られない。價值の側から見れば、一定の價值の若干の對象に對して有する關係が、共通の普遍的形態を示すといふことは、實際、該價值が、その普遍性の方面から實在的對象に關係せしめられてゐることを、示すものと言はねばならぬ。價值が普遍性の方面において問題とされながら、しかもそれと實在的對象との關係の個性的形態の上に、認識の興味が向けられるといふことは、意味を成さぬと思ふ。之に反して若干の對象が、一定の價值個性に關係せしめられる場合には、この關係の普遍的形態は認識の興味の外に置かれ、それらの對象の各個が、該價值に對して有する獨自の關係の規定が、主眼とされるのである。普遍的價

値の場合とは違つて、個性的價值が經驗的實在を支盤として實現され、保存され、損壞され、滅失される過程は、各個の個性的價值について全然特有なる様相を提示するものであり、従つてこの過程の行はれる支盤を構成する所の實在的對象は、特定の個性的價值の運命と如何様に交渉するかといふ見點からして、その個性を規定され能ふのである。かやうな仕方で行はれる認識の成果の一團は、全體として、個性的價值と經驗的實在との交渉の全様相を、その個性において表現するものであり、言ひ換へると、何等かの普遍妥當的價值に向けられた側面から、文化實在の一定區域の個性的態様を闡明するものである。

## 九

諸々の文化的意味は、價值に係はることによつてのみ、意味として成立する。素より文化的意味その者の中には、直ちに價值のすがたは宿されない。例へば若干の語の結合を一聯の敘情詩として認識し、又は或る人の或る動作を神への祈禱として認識するといふことは、その敘情詩の藝術的價值の把握又はその人の心意の宗教的價值の理會とは別個の意義を有するものである。しかも價值は、文化的意味の裡に、直ちにそのすがたを現さないとしても、文化的意味の成立に對する制約の一たる以上、文化的意味の係はしめられてゐる價值の性狀は、文化的意味に對して極めて深き内容的制約をあたねば已まない。謂はゞ價值的意味によつて抱擁され、後者のうちに融入

することに於いて、文化的意味は成り立つのである。あらゆる心理的現象が、何等か己れ自らを超越する對象への志向を示すやうに、あらゆる文化的對象は、必ずやそれを超越しつつ、しかも其れと内面的に連絡せる價值への關係を、暗示するのである。文化の世界は、文化の世界として獨立の構造と、獨自の形態とを有し、自然の世界に對峙すると同時に、價值の世界に對峙することとは、言ふまでもないけれど、文化の世界が、自然の世界に對して持する關係と、價值の世界に對して持する關係とが、根本的に相違することも亦明白である。すなはち自然の世界に對しては文化の世界は論理的に全く平等の地位において並立するに反し、價值の世界に對しては、文化の世界は論理的に従屬的な地位に置かれるのである。第一に、文化の種別相は、價值の種別相に基いて成立し、實在の係はしめられる價值の種別の異なるに従つて、文化的意味に種別を生ずると共に、實在の係はしめられる價值の種別が同一たる限り、文化的意味の内容は如何に多様であつても、その種別的規定は不變である。次に、價值の世界の内容的構造は、文化の世界の内容的構造の上に、その反映を投するのであつて、實在の係はしめられる價值が、價值普遍性たる場合には、それによつて定立される對象は、普遍的文化的意味において認識されるし、實在の係はしめられる價值が、價值個性たる場合には、それによつて定立される對象は、個性的文化的意味において認識されるのである。例へば、若干の種類の彩料の若干量を塗抹された所の長さ、幾尺、幅幾

尺かの布片が、一個の繪畫であるとして認識された場合に、繪畫的價值一般の理會なくして、その對象が一個の繪畫たることの意味を認識することは、到底不能たらざるを得ないけれど、この場合には、繪畫的價值一般が理會されて居り、對象が其れに係はしめられてゐることを以て、足れりとするのであつて、それ以上の條件は、あたへられることを要しない。同様に、或る一枚の版畫を以て浮世繪なりと判斷し、又は或る一枚の油繪を以て後期印象派の作品なりと判斷する場合には、各個の對象の係はしめられる價值は、浮世繪の價值類型たり、後期印象派の價值類型たれば、十分たるのである。斯かる立場からは、廣重の作品も、寫樂の作品も、國芳の作品も、同一の浮世繪なる普遍的概念に包括されるであらうし、セザンヌの作品も、その後塵を拜するにすぎない、エビゴローネンの作品も、ひとしく後期印象派の作品として認識されるであらう。之に反して廣重の作品、寫樂の作品、國芳の作品が、それ／＼獨自の個性を有する對象として、浮世繪の歴史的認識の立場から考察される場合には、それ等の對象が係はしめられる價值は、個性的價值又は典型的價值としての浮世繪の價值であり、勿論、この場合には、各個の作品の藝術的價值の評價は問題ではないとしても、浮世繪の個性的價值との關係を豫想せずして、各個の作品の文化的對象としての個性を規定することは、不能であらねばならぬ。更に後期印象派の歴史を考察せむとする者が、單なるエビゴローネンたちの數多くの作品には、一顧も拂ふことなくして、セザンヌ

の作品の一つ一つに深甚の興味を集注することの、正當とされる論理的根據は、後期印象派の個性的價值に關係せしめて一群の事實を考察するといふ認識の企圖のうちに與へられるものと言ふべきであらう。別個の方面からの例證を試みるならば——政治學者が君主政體を考察するに當り特定の個人の意志と他の多數の個人の意志との相互關係が、君主對臣民の關係として認識されるといふやうなことは、問題たる實在的關係が政治的價值に係はしめられることによつて、可能とされるのであるが、この場合に、係はしめられる價值が、政治的價值一般であるとすれば、君主政體が、時代を異にし、國家を異にするに伴うて提示する所の特殊的個性的態様は、認識の興味の焦點より逸するのであつて、それらの特殊的個性的態様を有する、さまざまの時代のさまざまの國家の君主政體を通じて、看取される普遍的形相の上に、認識の興味は集注されるのである。しかるに個々の時代の個々の國家における君主政體が、單に君主政體に普遍的なる形相の實現される特殊の場合として考察されないで、その個性的態様の方面から考察される場合には、その存立の地盤たる所の或る時代の或る國家を通じて顯現する個性的政治的價值(又は反價值)との關係の顧慮が、必然に要求されなければならぬ。或は人口の増減が勞賃に及ぼす影響の認識において、社會現象が經濟的價值(又は反價值)一般に關係せしめられて考察されるといふ立場からは、各時代の各社會における人口増減の現象と勞賃の變動の現象との關聯は、能ふかぎり普遍化され

抽象化されることにより、考察の結果として採擇されるであらう。さうでなくて、これらの二様の現象の關聯が、その個性的方面から考察されるといふ立場においては、或る時期の或る經濟社會を地盤として顯現せる個性的、經濟的價值(又は反價值)との關係が、所期の認識目的の達成のための條件たるであらう。かくて歴史的實在の側において、偉大なる個性、豐臺なる個性又は顯著なる個性が認識される場合には、必ずやその反面において、それと關係せしめられる價值又は反價值の側において、偉大なる、豐富なる又は顯著なる個性のあらはれてゐることが、論理的に推測され能ふわけであるし、前者の側における個性の貧小は、後者の側における個性の貧小を想到せしめるであらう。(尤もこれと逆な命題は必ずしも妥當しない)。そして關係せしめられる價值又は反價值のいずれか一方の個性の顯著なるために、歴史的實在の個性が顯著なる場合もあれば、關係せしめられる價值及び反價值が共に顯著なる個性を有することに基いて、歴史的實在の表面が顯著なる個性を以て彩られる場合もあるであらう。素よりその個性において類似せる、同一種別の二個の個性的價值の中の一つは、波瀾曲折に富める過程において實現されて居り、他は單調平板なる形態において實現されて居るといふやうなことは、有りがちであるが、一層深く洞察するならば、恰も問題たる價值との關係においては、その方面における差異が著しく緩和されることを、發見すべく、さうで無い迄もが、一方の側における實在的様相が複雑奇抜なりとして



認識されるのも、他方の側における其れが單調平板なりとして認識されるのも、ひとしく問題たる個性的價值との關係において、しかある可きわけであつて、價值の個性が實在の個性を制約するといふ論理的關係その者は、確乎として動かないのである。

論理的思惟以前の階段における價值の表象の直觀的多様は、論理的思惟の階段においては、一方には普遍的價值の世界の構成に役立てられ、他方には個性的價值の世界の構成に役立てられる。而して文化的認識は、價值關係の認識であるとして、それが思惟の作用たる以上は、關係せしめられる價值は、論理的に規定された價值でなければならぬ。しからば文化的認識において、實在の關係せしめられる價值は、普遍的價值たるか、個性的價值たるか、そのいづれかでなければならぬ。前の場合には、普遍化的文化的認識が成り立つし、後の場合には、個性化的文化的認識、すなはち歴史的認識が成り立つのである。その際、文化の普遍性又は個性は、價值の普遍性又は個性を、その儘模寫し又は再現するものではないけれど、後者との平行的關係においてのみ前者は成り立ち能ふのである。——これが、以上の所論の要旨であるが、果して文化的認識の二つの方向をみとめ得るか否かが、先づ疑問たるべく、次にはこの疑問が肯定されるとしても、私の試みたやうな考へ方によつて、文化的認識の二方向の本質的差違の由て來る根源が説明されるか否かが、更に疑問とされるであらう。前の疑問については、私は確信を以て肯定的な答へをあたへたいと思ふが、第二の論點については、一つの試みとしてかんがへた考へ方を、以上において展開したのであることを斷つて置きたい。